

## SURE: Shizuoka University REpository

<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

Title	青少年の規範意識に関する調査研究
Author(s)	馬居, 政幸; 松永, 由彌子; 一杉, 浩史; 三澤, 茂子
Citation	静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇. 34, p. 11-31
Issue Date	2003-03
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00002896">http://doi.org/10.14945/00002896</a>
Version	publisher
Rights	

This document is downloaded at: 2015-07-11T13:01:49Z

## 青少年の規範意識に関する調査研究

Researchies on the orm consciousness of youth

馬居政幸・松永由彌子・一杉浩史・三澤茂子  
Masayuki Umai, Yumiko Matunaga, Hiroshi Hitosugi, Sigeko Misawa

(平成14年10月7日受理)

### 1 分析の観点と手法

青少年の規範意識の低下が指摘されて久しい。しかし、その実態についてどこまで明らかになっているか。日常の様々な場面で出会った常識外れの言動への憤りや、旧来の常識では理解できない事件の報道に対するやりきれない思いの反映のレベルに止まっていないだろうか。

いつの時代も若者は年長の世代から批判の対象とされてきた。そのことと、現在言われる規範意識の低下の問題はどこが異なるのか。

本調査研究はこのような疑問に答えるために、静岡県青少年問題協議会による「青少年・保護者の規範意識に関する調査」を活用し、静岡県内在住の中高生を対象とした規範意識に関する質問調査の結果に対する多変量解析を用いた分析を試みた。(本調査の概要については、末尾資料を参照のこと)

通常調査では、知りたい内容を質問文にして、その回答結果を集計することから傾向を分析する手法がとられることが多い。それに対して、さまざまな場面における回答者の選択傾向を相互に比較しながら、その個々の回答の背後にある意識や行動の全体構造を明らかにするための分析手法として考案されたのが多変量解析である。特に、数量化Ⅲ類と名付けられる分析手法は、価値意識の構造や行動類型を析出するうえで優れた方法として用いられる。具体的には、日常誰もが会おうと思われる場面を数多く設定し、それぞれの場面で二者択一の選択肢を用意して回答を求める。その選択した結果を、コンピュータを用いて個々別々ではなく、全体として総合的に分析することから、調査対象者全体の意識や行動の隠れた傾向や構造を浮き彫りにする。

本調査研究では、このような多変量解析(数量化Ⅲ類)による分析を用いて、中・高校生の規範意識の構造や行動類型を析出することから、冒頭の疑問に答えることができると考え、そのための質問を用意した。それが、以下の18項目にわたる二者択一の問いである。

問 あなたは、もし次のような場面に出会ったらどうしますか。それぞれ近いほうの番号に丸をつけてください。(数字は選択した比率、無回答は省いた)

① 普段、学校がある日、あなたは、

1 自分で起きようとしている 37.2%    2 誰かにおこしてもらうことが多い 62.4%

② 普段、学校がある日、あなたは、

1 前に日に学校のしたくをする 82.8%    2 その日の朝に学校のしたくをする 17.1%

③ いつも学校に通っている友だちとけんかしました。あなたは、

- 1 自分から謝って一緒に学校に行く 78.1%    2 友だちが謝ってくるまで一緒に行かない 21.5%
- ④ 友だちがいじめにあってることを知りました。あなたは、  
 1 自分までいじめられるのはいやだから、友だちとのつきあいをやめる 10.4%  
 2 自分までいじめられても、友だちの味方になる 89.5%
- ⑤ 友だちがテストで100点を取りましたが、あなたは取れませんでした。その時あなたは、  
 1 頑張っているんだなと感心する 55.0%    2 負けてしまってくやしいと思う 45.0%
- ⑥ 友だちにあなたの短所を指摘されました。その時あなたは、  
 1 「いわれなくてもわかっている」と思う 45.4%    2 素直に「直そう」と思う 54.4%
- ⑦ 授業中、友だちが話しかけてきました。その時あなたは、  
 1 「授業中だよ」と注意する 42.9%    2 一緒に話をする 57.1%
- ⑧ 夜遅く、友だちから「どうしても会いたい」と電話がありました。あなたは、  
 1 断る 77.2%    2 友だちに会いに行く 22.8%
- ⑨ 友だちからもらったノートが万引きしたものだということがわかりました。あなたは、  
 1 そのまま使う 8.8%    2 絶対に使わない 90.9%
- ⑩ 電車に乗ったら席が空いていません。友だちは床に座りました。あなたは、  
 1 一緒に床に座る 13.4%    2 自分は立っている 86.1%
- ⑪ 自転車で乗っていると、友だちが二人乗りさせてほしいといってきました。あなたは、  
 1 乗せてあげる 19.1%    2 断る 80.4%
- ⑫ 買ったばかりのマンガの本をなくしてしまいました。あなたは、  
 1 あきらめて、新しく買う 6.7%    2 見つかるまで、探す 92.8%
- ⑬ 捨て犬を見つけました。あなたは、  
 1 とりあえず、飼い主が見つかるまで自分が世話をする 57.6%  
 2 そのまま放っておく 42.1%
- ⑭ 『男はたくましく、女はやさしい』という考え方があります。あなたは、  
 1 男と女は違うので、当然だと思う 29.3%  
 2 男とか女とかで決めるのはおかしいと思う 70.2%
- ⑮ 両親が風邪を引いて、寝込んでいます。あなたは夕飯をどうしますか。  
 1 自分で作って食べる 69.9%    2 コンビニのお弁当か出前を頼む 29.8%
- ⑯ 道で近所の人を見つけました。あなたは、  
 1 あいさつをすることが多い 75.4%    2 あいさつしないことが多い 24.1%
- ⑰ 電車で疲れて席に座っていると、お年寄りが乗ってきました。あなたは、  
 1 お年寄りに席を譲る 72.6%    2 そのまま席に座っている 27.0%
- ⑱ 電車に乗っていたら、携帯電話がかかってきました。あなたは、  
 1 電話にでる 42.6%    2 電話にでない 56.9%

各問いの内容や集計結果については、『青少年・保護者の規範意識意識に関する調査 結果報告（静岡県青少年問題協議会 静岡県教育委員会 平成13年3月）を参照いただきたい。ここでは、多変量解析の分析過程とその結果明らかになった傾向をできるだけ主観を交えず、評価することなく紹介したい。その理由は、青少年のみでなく、規範意識に代表される価値意識やそれに基づく行動様式というのは、世代や文化や時代によって大きく異なるからである。ある人にとっては問題としてとらえら

れることでも、別の人からみれば当然とされることも多い。まして、現在の日本の社会は、現状の転換の必要性においては同意されても、その具体的な方向についてはいまだコンセンサスを得ているとは言いがたいのではないか。そのため、本書の役割を具体的な対策ではなく、それを考えるための基礎資料を提示することに止めたい。

もっとも、調査設計の当初からかかわった者として、緊急に対処すべき施策の案がないわけではない。だがそれは、調査結果の必然として出てくるものではなく、分析者の価値観が大きくかわることを避け得ない。すなわち、具体的に今すぐに求められる対策、中長期的な視野に基づく施策や運動、いずれにせよそのあり方や是非の判断は、実証的なデータを用いつつも、さまざまな他の社会的条件や価値観、あるいは子ども像や未来像を総合的に加味することから生まれるものである。またそうでなければならない。調査結果の安易な一般化、そしてそれに基づく短絡的な施策化は、問題の本質を見誤り、問題解決に寄与しないばかりか、その対策がまた新たな問題を生むという悪循環に陥る危険性があるからである。

子どもたち、そして若者は、今ではなく未来を生きる者である。その不可解な行動は、未来への準備ととらえることも可能である。彼ら彼女らの何が問題で、何が課題なのか。あくまで過去や現在ではなく、未来の基準から判断しなければならない。だが、その未来の基準が未だ不明瞭だとすれば、何を基準に考えればよいのか。

これから紹介する調査結果についての多変量解析に基づく中・高校生の意識や行動の傾向が、彼ら彼女らの可能性を開く資料として生かされることを願って、あえて上記の断り書きを付記したことをご理解願いたい。

なおコンピュータによる分析では、世界的に最も一般的に使用されているSPSSという統計ソフトを用いる。そのため、SPSSの統計パッケージのなかにある数量化Ⅲ類と同質の等質性分析を使用し、各設問の選択肢の数量化と、各設問の回答に基づくサンプルごとの数量化という2つの数量化を実施する。その上で、似たような回答傾向を示す調査対象者をグループ化するために考案されたクラスタ分析という手法を用いる。その際に、特にデータ量が膨大であるため、階層クラスタ分析ではなく非階層クラスタ分析（SPSSでは大規模ファイルのクラスタ分析）を使用する。

この手法は、クラスタの数を事前に指定しておく必要があるため、3種～9種のクラスタを指定し、それぞれに分析を試みた。なお、このクラスタ分類の精度を検証するために判別分析を行ったところ、3種～9種のいずれの場合においても95%以上のあてはまりの良さを示しており、分析には有意な分類であることが確認された。

本研究では、以上の分析結果を検討することにより、主に9クラスタに分類した結果が最も現在の中・高校生の規範意識を解明するうえで有効と判断し、他の設問とのクロス集計を行いながら分析を進めた。

## 2 中・高校生の規範意識や行動様式を枠付ける基準の析出

問12を構成する18種36個の選択肢の結果に対して、数量化Ⅲ類による分析（等質性分析）を試みたところ、2つの要素に対する得点が得られた（表-1・Ⅰ軸得点、表-2・Ⅱ軸得点）。これは18種36個の質問が相互にどのような関係にあるかを数値で示したものである。それが2本の軸上にあるということは、この2つの軸それぞれにそって与えられた数値の順番に36の選択肢を並べ、その傾向を読み取ることから、調査対象者の意識の中にある2つの判断基準の枠組みが析出されることを意味する。

そこでまずⅠ軸上の得点を見ていくと、表-1が示すように、得点上位には次の項目が並んでいる。

「授業中友だちが話しかけてきた時は授業中と注意する」

「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時電話に出ない」

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時は拒否する」

逆に得点下位は次のようである。

「電車で友だちが床に座った時一緒に床に座る」

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時使わない」

「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時あきらめて買う」

プラスの数値の高い項目は、いずれも現在の社会常識から考えて妥当と思われる行為であり、逆にマイナスの数値の高い項目は社会的に認められない行為と言えよう。その意味で、Ⅰ軸を現在の社会の中に既に存在する規範（常識）に従う（同調）か従わない（逸脱）かという判断基準の枠組みとして位置づけ、「既存規範同調-既存規範逸脱」の軸と名付けたい。

同様に、各選択肢に対してⅡ軸上に与えられた得点の順に見ていくと、表-2にまとめてあるように、プラス数値が最も高い順から次のようになる。

「友だちがいじめにあっていることを知った時、味方にならない」

「道で近所の人を見かけた時、挨拶しない」

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、拒否する」

また、マイナス数値が高い順では、次のようになる。

「捨て犬を見つけた時、世話をする」

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、席をゆずる」

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、会いに行く」

このことからⅡ軸は、友だち、近所の人、お年寄り、捨て犬など、自分以外の人やものが求めることを優先するか、自分の都合の方を優先するか、という判断基準にかかわる枠組みであることが読み取れる。そこで、Ⅱ軸を、人やものとの関係をもつことを重視するか、関係をもたないようにすることを優先するかという判断基準の枠組みとして位置づけ、「関係志向-自己志向」と名付けたい。

表 1・各質問の選択肢に与えられた I 軸得点

既存規範同調

	質 問	選 択 肢	I 軸
(1)	7. ①授業中に友だちが話しかけてきた時	授業中と注意	1.25
(2)	18. ②電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話に出ない	0.76
(3)	11. ②友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りを拒否	0.72
(4)	9. ②友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時	万引品非使用	0.56
(5)	8. ①夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜は断る	0.49
(6)	2. ①学校のしたく	前日したく	0.35
(7)	17. ①電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずる	0.35
(8)	10. ②電車で友だちが床に座った時	床に座らない	0.27
(9)	6. ②友だちに自分の短所を指摘された時	直そうと思う	0.21
(10)	15. ①両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	作って食べる	0.20
(11)	16. ①道で近所の人を見かけた時	挨拶する	0.17
(12)	1. ①学校がある日の朝	自分で起きる	0.16
(13)	3. ①一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	自分から謝る	0.15
(14)	12. ②買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	発見まで探す	0.15
(15)	4. ②友だちがいじめにあっていることを知った時	味方になる	0.14
(16)	13. ①捨て犬を見つけた時	捨て犬を世話	0.12
(17)	5. ②友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	くやしい	0.09
(18)	14. ②「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	性で決めない	0.04
(19)	13. ②捨て犬を見つけた時	捨て犬は放置	-0.08
(20)	5. ①友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	感心する	-0.09
(21)	14. ①「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	男と女は違う	-0.13
(22)	1. ②学校がある日の朝	起こしてもらう	-0.14
(23)	7. ②授業中に友だちが話しかけてきた時	一緒に話す	-0.21
(24)	6. ①友だちに自分の短所を指摘された時	言われなくてもわかっている	-0.23
(25)	3. ②一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	謝らせる	-0.32
(26)	8. ②夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜でも会う	-0.33
(27)	2. ②学校のしたく	当日したく	-0.34
(28)	15. ②両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	コンビニか出前	-0.36
(29)	16. ②道で近所の人を見かけた時	挨拶しない	-0.37
(30)	11. ①友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りする	-0.39
(31)	4. ①友だちがいじめにあっていることを知った時	味方にならない	-0.40
(32)	18. ①電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話にでる	-0.41
(33)	17. ②電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずらない	-0.53
(34)	12. ①買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	あきらめて買う	-0.67
(35)	9. ①友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時	万引品使用	-0.68
(36)	10. ①電車で友だちが床に座った時	床に座る	-0.88

既存規範逸脱

表一・各質問の選択肢に与えられたⅡ軸得点

	質 問	選 択	Ⅱ 軸
(1)	4. ①友だちがいじめにあっていてることを知った時	味方にならない	0.62
(2)	16. ②道で近所の人を見かけた時	挨拶しない	0.60
(3)	11. ②友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りを拒否	0.58
(4)	3. ②一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	謝らせる	0.53
(5)	17. ②電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずらない	0.50
(6)	8. ①夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜は断る	0.50
(7)	7. ①授業中に友だちが話しかけてきた時	授業中と注意	0.44
(8)	13. ②捨て犬を見つけた時	捨て犬は放置	0.44
(9)	15. ②両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	コンビニか出前	0.44
(10)	6. ①友だちに自分の短所を指摘された時	言われなくてもわかっている	0.36
(11)	12. ①買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	あきらめて買う	0.19
(12)	5. ②友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	くやしい	0.20
(13)	18. ②電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話に出ない	0.12
(14)	9. ②友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時	万引品非使用	0.08
(15)	10. ②電車で友だちが床に座った時	床に座らない	0.08
(16)	14. ②「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	性で決めない	0.07
(17)	1. ①学校がある日の朝	自分で起きる	0.02
(18)	2. ②学校のしたく	当日したく	0.02
(19)	1. ②学校がある日の朝	起こしてもらう	-0.02
(20)	2. ①学校のしたく	前日したく	-0.02
(21)	12. ②買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	発見まで探す	-0.05
(22)	7. ②授業中に友だちが話しかけてきた時	一緒に話す	-0.07
(23)	18. ①電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話にでる	-0.07
(24)	9. ①友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時	万引品使用	-0.10
(25)	4. ②友だちがいじめにあっていてることを知った時	味方になる	-0.20
(26)	5. ①友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	感心する	-0.21
(27)	14. ①「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	男と女は違う	-0.21
(28)	3. ①一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	自分から謝る	-0.24
(29)	15. ①両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	作って食べる	-0.24
(30)	10. ①電車で友だちが床に座った時	床に座る	-0.26
(31)	16. ①道で近所の人を見かけた時	挨拶する	-0.28
(32)	11. ①友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りする	-0.31
(33)	6. ②友だちに自分の短所を指摘された時	直そうと思う	-0.33
(34)	8. ②夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜でも会う	-0.33
(35)	17. ①電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずる	-0.33
(36)	13. ①捨て犬を見つけた時	捨て犬を世話	-0.63

自己志向

関係志向

※この2つの軸は、0.00001の収束基準に対し8回の反復で算出され、寄与率は、Ⅰ軸が69.5%、Ⅱ軸が30.5%である。なお、この時点で各設問の回答に基づくサンプルごとの数量化も行われており、選択肢の数量化と同様にⅠ軸（「既存規範同調－既存規範逸脱」）、Ⅱ軸（「関係志向－自己志向」）に対する得点が1,260サンプルごとに付けられている。





●5分割した場合 (図-3)、既存規範を逸脱するクラスタが、関係志向のものと自己志向のものに分類されている。

●6分割した場合 (図-4)、これまで2つの軸に対して特性を持ったクラスタに分けられていたが、領域マップの中央に I 軸に対して II 軸に対しても得点の少ない、特性のないクラスタが現れているのが特徴的である。他のクラスタはほぼ4分割した場合に近いものの、関係志向のものが既存規範に同調するクラスタと逸脱するクラスタに分類されている。

図-3・5分割

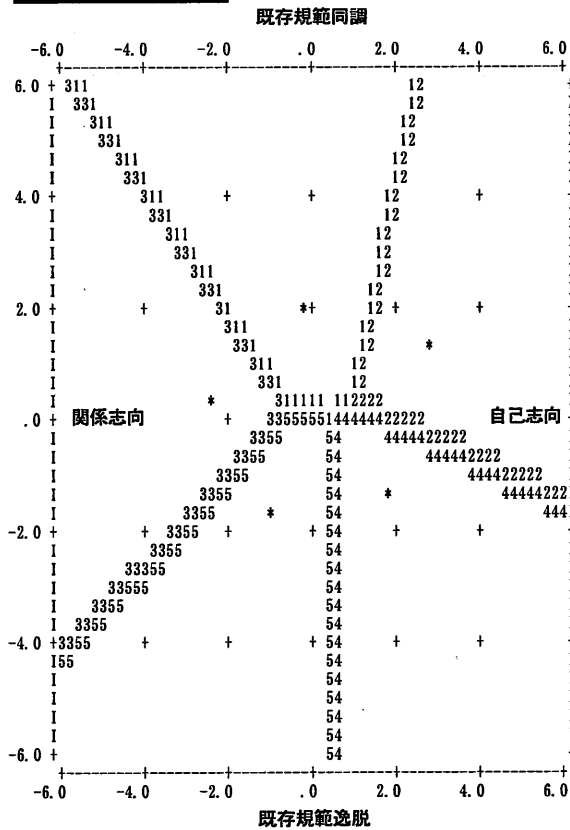
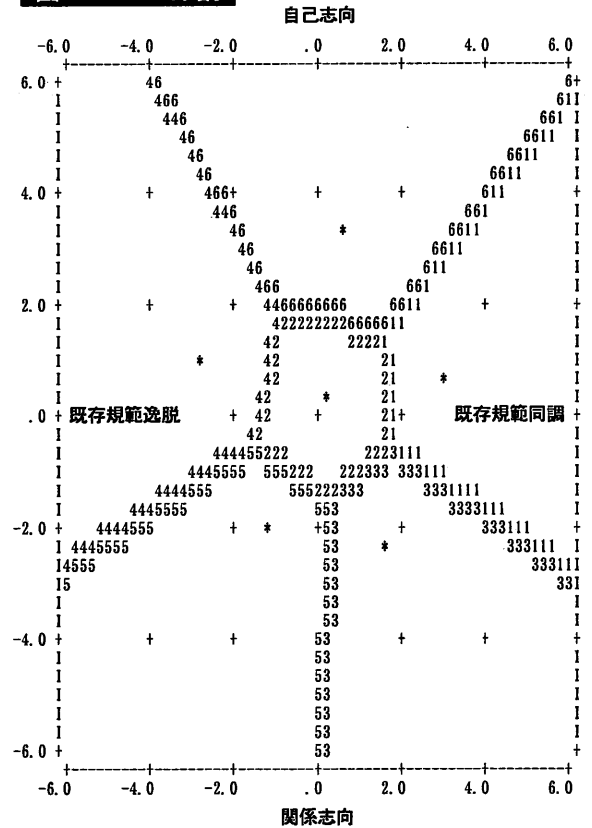


図-4・6分割



●7分割した場合(図-5)、中央のクラスタをほぼ維持しつつ、関係志向のクラスタ、自己志向のクラスタに分類され、他の4つのクラスタは、既存規範に同調しながら関係志向、自己志向、既存規範を逸脱しながら関係志向、自己志向に分類されている。

●8分割した場合(図-6)、中央のクラスタをほぼ維持しつつ、7分割に比べて既存規範に同調で関係志向のクラスタが2分されている。

図-5・7分割

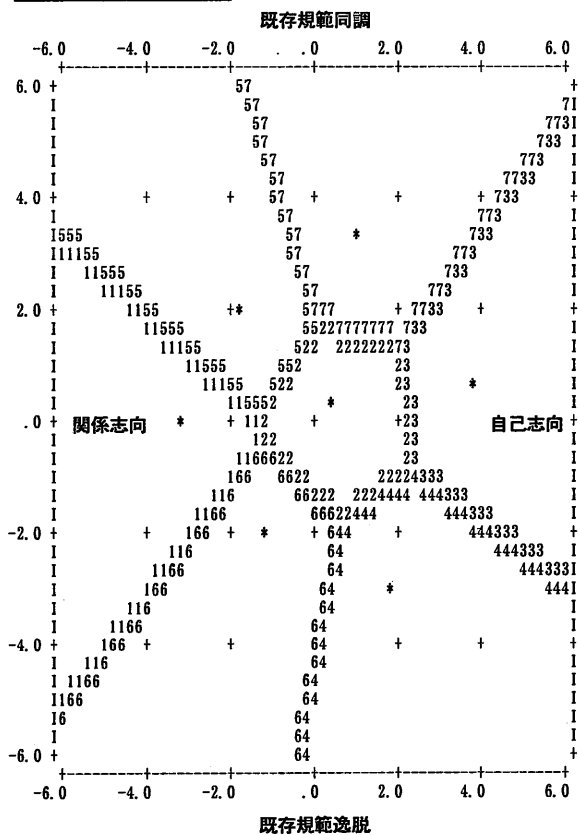
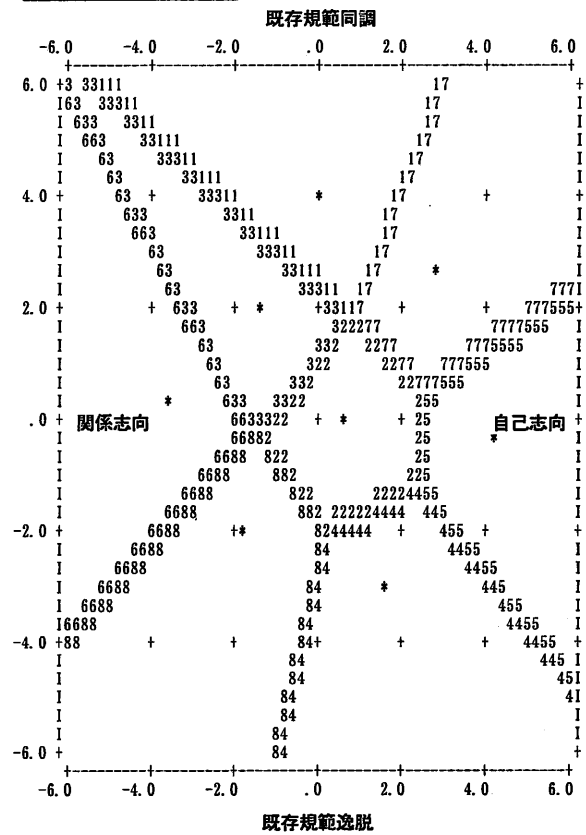
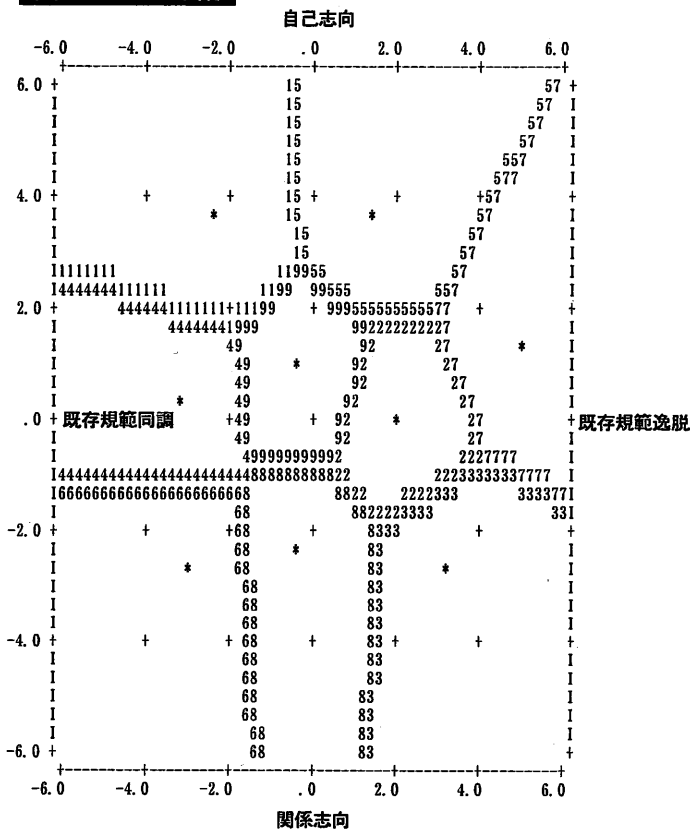


図-6・8分割



●9分割した場合(図-7)、中央に2つのクラスが現れている。他の7つのクラスはこれまでと明らかに異なる分類がなされ、自己志向で既存規範に同調、逸脱のもの、既存規範に同調のもの、関係志向のもの、関係志向で既存規範に同調、逸脱のもの、自己志向で既存規範をやや逸脱するもの、既存規範を逸脱し、やや自己志向のものとなっている。

図-7・9分割



次に、3~9に分割したそれぞれのクラスが中・高校生別、性別にどのような特徴があるか、中・高校生別、性別のクロス集計により分析した。この作業により、9分割のものが非常に特徴のあるものとなったため、以降は9分割したものについて分析していく(図-8)。

#### 4 9種のクラスターの特性

##### (1) 全体の傾向

中央に現れたクラスターは第2クラスターと第9クラスターで、それぞれ155名、183名が属し、全体の26.8%を占めている。

中・高校生・性別に大きな偏りはないが、第2クラスターは男性、第9クラスターは女性が比較的多くなっている。

第1クラスターは、既存規範に同調し、自己志向に偏っており、中学生が多くなっている。

第3クラスターは、既存規範を逸脱し、関係志向に偏っており、高校生男性が多くなっている。

第4クラスターは、既存規範に同調するものの、関係志向・自己志向の軸に対しては中間に位置し、女性が多くなっている。

第5クラスターは、既存規範を逸脱し、自己志向に偏っており、中学生男性が多くなっている。

第6クラスターは、既存規範に同調し、関係志向に偏っており、やや女性が多くなっている。

第7クラスターは、既存規範を逸脱し、やや自己志向に偏っており、男性が多く、最も少ない73名が属している。

第8クラスターは、既存規範の軸に対しては中間に位置し、関係志向に偏っており、高校生が多くなっている。

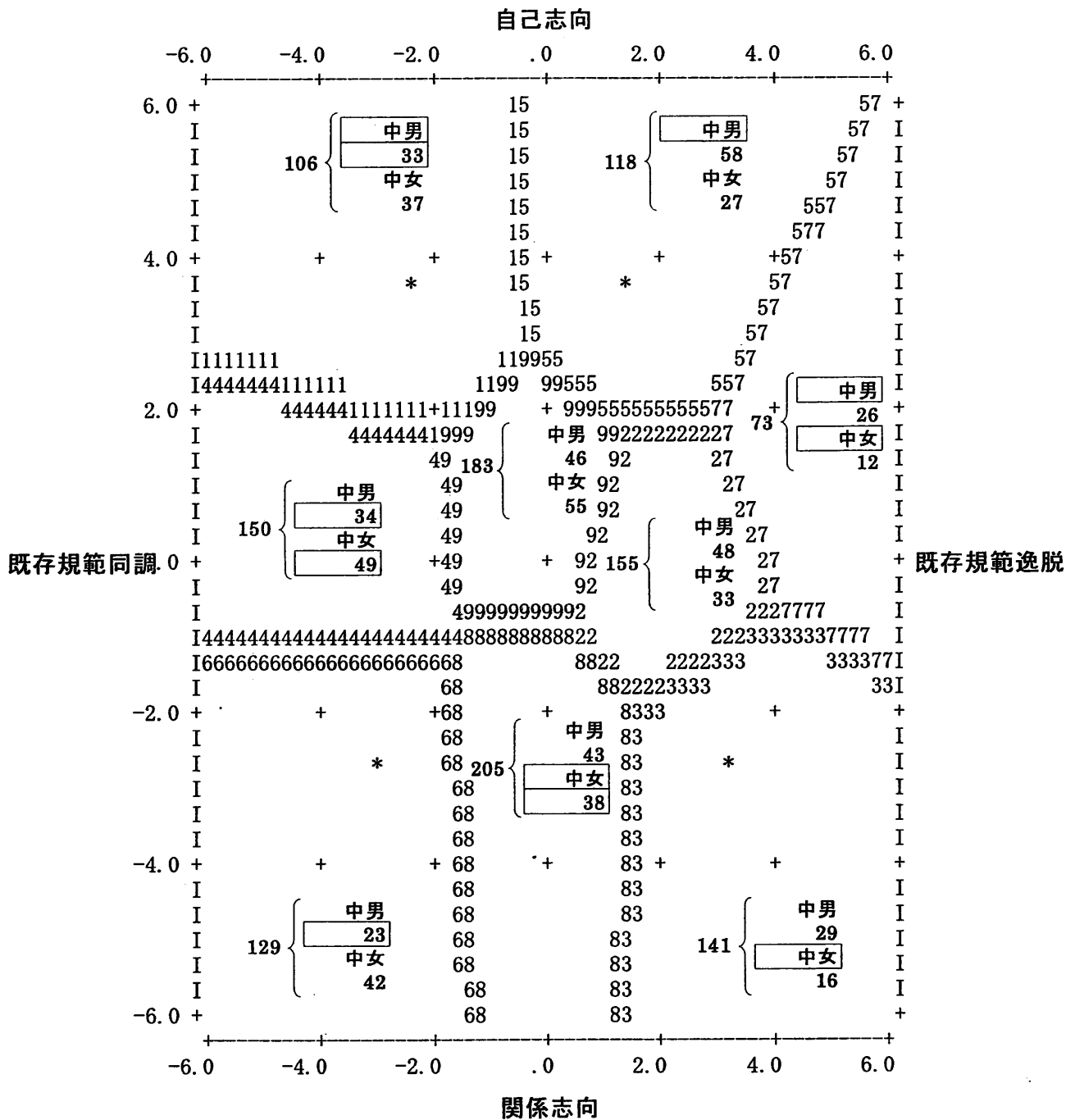
これらを総合すると、まず、既存規範に同調する傾向は女性に強く、逸脱する傾向は男性に強くなっている。また、中学生は既存規範に同調傾向にあり、高校生は関係志向が強くなっている。

そのため、女性は既存規範に同調しながら、中学生から高校生になるにつれて自己志向から関係志向へと移り変わる傾向があることが読み取れる。図-8で見ると、図の左上から左下にかけて反時計回りである。

男性は既存規範を逸脱したまま自己志向から関係志向へと移り変わる傾向があることが指摘できよう。図-8で見ると、図の右上から右下にかけて時計回りである。

ただし、これらは傾向であって、いずれのクラスターにも男性、女性、中学生、高校生が属し、男女の性差や中・高校生の差異を示すものではないことを確認しておきたい。

図-8・9分割の詳細



## (2) 各クラスタの特性

さらに各クラスタの特性を明らかにするために、グループ分けに使用した問12と9つのクラスタをクロス集計(表-3)することを試みた。これにより、どのような回答傾向によって9分割されたのかが把握できるとともに、前述の全体の傾向を裏付けることが可能になると考えたからである。

ここでは特に、問12の各質問項目の中で、他のクラスタと比較して突出して回答割合が高い項目を「かなり影響力のある項目」、また回答割合がやや高い項目を「やや影響力のある項目」としてとらえる。そして、各クラスタにどのような項目が、「かなり」もしくは「やや」影響力あるものとして位置づけられているかをみるために、クラスタごとに項目内容を列記しておきたい。

ところで、通常、このような数量化とクラスタ分析は、上記の手順に基づき各クラスタの特性を明らかにした後、各クラスタの特性に応じてそのクラスタに所属する典型的な人間類型を想定し、誰もが理解(想像)しやすいネーミングを施し、より鮮明に調査結果の分析から明らかになった課題をアピールすることが多い。本調査の分析においてもそのことを試み、部分的に発表も行った。しかし、その過程で、データが示すさまざまな課題を切り捨てざるを得なかった。何よりも、クラスタの析出はコンピュータによる数量化に基づくものだが、それにネーミングするという作業は、分析者の価値観が非常に反映する。特に、子どもや若者の規範意識という微妙な問題について、安易なラベリングに内在する危うさについては、本稿の冒頭で指摘した。

そのため、一旦はネーミングまで分析を進めたものの、本報告書においては、分析の過程を提示するに止めることにした。言いかえれば、冒頭の断り書きの背後には、本調査の設計から分析にまでかかわってきた分析者自身の反省がある。とりわけ、上記の手順を経てネーミングの作業にとりかかり、さらには具体的な問題点やその解決方法にまで考察を進めようとしたときに調査結果や施策の方向をより明確に指摘するためにあまりにも多くの内容(実証データが示す)を捨象する一方で、データ以外の分析者の視点が次々と加味されていることを自覚せざるを得なかったからである。

したがって、以下の記述では、それぞれのクラスタの特性を理解する上で必要な項目を列記するにとどめたい。その解釈は本報告を読まれる方にゆだねたい。

### ▼第1クラスタ(既存規範同調・自己志向・中学生・8.4%)

かなり影響力のある項目は、次の項目である。

- 「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(99.1%)、
- 「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、見つかるまで探す」(98.1%)、
- 「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、絶対に使わない」(93.4%)、
- 「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、自分で作って食べる」(89.6%)、
- 「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出ない」(82.1%)、
- 「学校のしたくは前の日にする」(76.4%)、
- 「学校がある日の朝、自分で起きるようにしている」(61.3%)、
- 「授業中に友だちが話しかけてきた時、授業中だよと注意する」(61.3%)、

やや影響力のある項目をあげると次のようになる。

- 「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、お年寄りに席を譲る」(94.3%)、
- 「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、断る」(89.6%)、
- 「友だちがいじめにあっていてを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」(88.5%)、

「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、自分から謝って一緒に学校に行く」(81.7%)、  
 「友だちに自分の短所を指摘された時、素直に直そうと思う」(74.5%)、  
 「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、断る」(72.4%) となっている。

▼第2クラス (偏りなし・男性・12.3%)

かなり影響力のある項目はない。

やや影響力のある項目は、「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(96.8%) の1項目のみとなっている。

その他の項目は、回答者全体の回答割合に近い値となっている。

▼第3クラス (既存規範逸脱・関係志向・高校生男性・11.2%)

かなり影響力のある項目は、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(98.6%)、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、そのまま使う」(93.6%)、

「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出る」(92.2%)、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、友だちに会いに行く」(90.7%)、

「学校のしたくはその日の朝にする」(83.7%)、

「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、コンビニのお弁当か出前を頼む」(65.7%)、

「学校がある日の朝、誰かに起こしてもらうことが多い」(63.8%)、

「電車で友だちが床に座った時、一緒に床に座る」(63.1%)、

「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、あきらめて新しく買う」(45.0%)、

「男はたくましく女はやさしいという考え方は、男と女は違うので当然だと思う」(33.3%) となっている。

やや影響力のある項目は、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」(95.7%)、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、そのまま座っている」(80.1%) となっている。

▼第4クラス (既存規範同調・女性・11.9%)

かなり影響力のある項目は、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、お年寄りに席を譲る」(96.0%)、

「友だちがいじめにあっていてを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」(94.0%)、

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをすることが多い」(93.3%) となっている。

やや影響力のある項目は、

「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、見つかるまで探す」(94.0%)、

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(89.9%)、

「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、自分から謝って一緒に学校に行く」(88.4%)、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、絶対に使わない」(86.7%)、

「友だちに自分の短所を指摘された時、素直に直そうと思う」(75.3%)、

「学校のしたくは前の日にする」(70.0%)となっている。

▼第5クラス (既存規範逸脱・自己志向・中学生男性・9.4%)

かなり影響力のある項目は、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、断る」(90.7%)、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、断る」(89.0%)となっている。

やや影響力のある項目は、

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(96.6%)、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、絶対に使わない」(88.1%)、

「男はたくましく女はやさしいという考え方は、男とか女とかで決めるのはおかしいと思う」(86.3%)、

「友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時、負けてしまってくやしいと思う」(65.3%)、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、授業中だよと注意する」(45.8%)となっている。

▼第6クラス (既存規範・関係志向・女性・10.2%)

かなり影響力のある項目は、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(98.4%)、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」(98.4%)、

「友だちがいじめにあっていてを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」(94.5%)、

「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、自分から謝って一緒に学校に行く」(93.8%)、

「捨て犬を見つけた時、とりあえず飼い主が見つかるまで自分が世話をする」(84.4%)、

「友だちに自分の短所を指摘された時、素直に直そうと思う」(79.7%)、

「友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時、頑張っているんだなと感心する」(65.6%)

となっている。

やや影響力のある項目は、

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをすることが多い」(96.1%)、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、お年寄りに席を譲る」(91.4%)、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、友だちに会いに行く」(89.8%)、

「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、自分で作って食べる」(83.7%)、

「学校がある日の朝、誰かに起こしてもらうことが多い」(60.2%)となっている。

▼第7クラス (既存規範逸脱・やや自己志向・男性・5.8%)

かなり影響力のある項目は、「捨て犬を見つけた時、そのまま放っておく」(94.5%)、

「友だちに自分の短所を指摘された時、言われなくてもわかっていると思う」(87.7%)、

「男はたくましく女はやさしいという考え方は、男とか女とかで決めるのはおかしいと思う」(87.7%)、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、そのまま座っている」(86.3%)、

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをしないことが多い」(76.7%)、



「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、友だちが謝ってくるまで一緒に行かない」(76.4%)、

「友だちは100点を取ったのに自分を取れなかった時、負けてしまってくやしいと思う」(75.3%)、

「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられるのはいやだから友だちとのつきあいをやめる」(66.7%)、

「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、コンビニのお弁当か出前を頼む」(65.8%)

となっている。

やや影響力のある項目は、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(91.8%)、

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(82.2%) となっている。

#### ▼第8クラス (関係志向・高校生・16.3%)

かなり影響力のある項目は、「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(99.5%) の1項目のみとなっている。

やや影響力のある項目は、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」(97.1%)、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、友だちに会いに行く」(89.3%)、

「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出る」(88.8%)、

「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」(83.3%)、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、そのまま使う」(73.5%)、

「友だちは100点を取ったのに自分を取れなかった時、頑張っているんだなと感心する」(59.3%)

となっている。

#### ▼第9クラス (偏りなし・女性・14.5%)

かなり影響力のある項目はない。

やや影響力のある項目は、「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(90.1%) の1項目のみとなっている。その他の項目は、回答者全体の回答割合に近い値となっている。

表-3・グループ分けに使用した問12に対する9クラスターごとの回答の割合

Q12 人数  (%)										(%)
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	合計 1,260  (100.0)  平均
1-①自分で起きる ②起こしてもら う	◎61.3 38.7	43.2 56.8	36.2 ◎63.8	48.0 52.0	47.5 52.5	39.8 ○60.2	45.2 54.8	43.4 56.6	49.7 50.3	45.7 54.3
2-①前日仕度 ②当日仕度	◎76.4 23.6	47.1 52.9	16.3 ◎83.7	○70.0 30.0	55.9 44.1	44.5 55.5	41.1 58.9	36.3 63.7	59.6 40.4	49.1 50.9
3-①自分から謝る ②謝らせる	○81.7 18.3	54.5 45.5	43.5 56.5	○88.4 11.6	63.6 36.4	◎93.8 6.3	23.6 ◎76.4	76.8 23.2	71.3 28.7	68.7 31.3
4-①味方にならない ②味方になる	11.5 ○88.5	40.9 59.1	45.6 54.4	6.0 ◎94.0	27.1 72.9	5.5 ◎94.5	◎66.7 33.3	16.7 ○83.3	20.3 79.7	24.4 75.6
5-①感心する ②くやしい	48.1 51.9	46.5 53.5	55.3 44.7	45.3 54.7	34.7 ○65.3	◎65.6 34.4	24.7 ◎75.3	○59.3 40.7	44.8 55.2	48.9 51.1
6-①いわれなくとも ②直そうと思う	25.5 ○74.5	58.1 41.9	70.0 30.0	24.7 ○75.3	54.2 45.8	20.3 ◎79.7	◎87.7 12.3	47.5 52.5	50.8 49.2	47.4 52.6
7-①授業中と注意 ②一緒に話す	◎61.3 38.7	3.2 ○96.8	1.4 ◎98.6	16.0 84.0	○45.8 54.2	1.6 ◎98.4	8.2 ○91.8	0.5 ◎99.5	9.9 ○90.1	14.1 85.9
8-①夜は断る ②夜でも会う	○72.4 27.6	41.9 58.1	9.3 ◎90.7	40.0 60.0	◎89.0 11.0	10.2 ○89.8	67.1 32.9	10.7 ○89.3	53.6 46.4	39.9 60.1
9-①万引品使用 ②万引品非使用	6.6 ◎93.4	49.7 50.3	◎93.6 6.4	13.3 ○86.7	11.9 ○88.1	60.9 39.1	58.9 41.1	○73.5 26.5	26.9 73.1	45.3 54.7
10-①床に座る ②床に座らない	0.9 ◎99.1	18.7 81.3	◎63.1 36.9	10.1 ○89.9	3.4 ○96.6	34.4 65.6	17.8 ○82.2	40.0 60.0	10.9 89.1	23.6 76.4
11-①二人乗りする ②二人乗り拒否	10.4 ○89.6	67.5 32.5	○95.7 4.3	68.0 32.0	9.3 ◎90.7	◎98.4 1.6	39.7 60.3	○97.1 2.9	57.4 42.6	65.4 34.6
12-①あきらめて買 う ②発見まで探す	1.9 ◎98.1	21.3 78.7	◎45.0 55.0	6.0 ○94.0	13.6 86.4	14.0 86.0	30.1 69.9	24.9 75.1	11.5 88.5	18.7 81.3
13-①捨て犬世話 ②捨て犬は放置	50.0 50.0	18.1 81.9	24.5 75.5	75.0 25.0	11.9 88.1	◎84.4 15.6	5.5 ◎94.5	50.0 50.0	31.7 68.3	40.8 59.2
14-①男と女は違う ②性で決めない	19.0 81.0	22.6 77.4	◎33.3 66.7	27.3 72.7	13.7 ○86.3	31.8 68.2	12.3 ◎87.7	29.8 70.2	27.9 72.1	25.5 74.5
15-①作って食べる ②コンビニ出前	◎89.6 10.4	50.3 49.7	34.3 ◎65.7	86.7 13.3	50.0 50.0	○83.7 16.3	34.2 ◎65.8	71.7 28.3	67.8 32.2	64.7 35.3
16-①挨拶する ②挨拶しない	90.6 9.4	53.5 46.5	44.7 55.3	◎93.3 6.7	50.8 49.2	○96.1 3.9	23.3 ◎76.7	69.3 30.7	74.3 25.7	68.3 31.7
17-①席譲る ②席譲らない	○94.3 5.7	32.9 67.1	19.9 ○80.1	◎96.0 4.0	47.5 52.5	○91.4 8.6	13.7 ◎86.3	57.1 42.9	73.8 26.2	60.2 39.8
18-①携帯電話出る ②携帯電話出な い	17.9 ◎82.1	79.4 20.6	◎92.2 7.8	39.3 60.7	31.4 68.6	82.9 17.1	76.4 23.6	○88.8 11.2	59.0 41.0	65.1 34.9

◎：かなり影響力のある項目

○：やや影響力のある項目

## 5 終わりにかえて

以上、各クラスタの特性を明らかにするために、クラスタ析出のために用意した問12の36個の質問選択肢とのクロス集計の結果をもとに、各クラスタに影響力がある項目の度合いに応じて列記してきた。クラスタによっては、非常に特性を明確に把握できるものもあれば、ほとんど顕著な傾向を読み取ることができないものもある。

特性がないということは、このクラスタに属する中・高校生に特性がないということではない。本調査で用意した質問によっては、顕著な特性を浮かび上がらすことができなかつたということにすぎない。また、問題が規範意識の低下の状況である以上、特性がないということは、特に顕著な問題があるわけではない、ということを示唆しているのかもしれない。しかし、他方で、思春期という時期に、特に顕著な特性を示すことができないということは、現状においては平均値にあるものの、今後きたるべき新たな時代と社会の条件のもとでは、マイナス条件になり得る可能性もある。もちろん、その逆も考えられる。

他方、非常に特性が顕著な第1クラスタや第3クラスタも、それをどのように評価するかによって問題解決の方向は大きく変化する。どちらかと言えば優等生タイプの第1クラスタの場合、中学生が多いことから、中学から高校へと成長するにしたがって、既存の規範への同調が崩れ新たな規範を求めて模索する、というストーリーが浮かんでくる。このことは、第3クラスタによっても補強される。高校男子を中心に、既存規範に対する逸脱行動を存在証明（アイデンティティ）とするかにみえるこのクラスタに所属する者の行動は、多くの大人にとってまさに規範意識の低下という危惧を象徴するものとなる。しかし、模範生が中学中心、問題生が高校中心ということは、規範意識の低下という問題の背景が、中学生や高校生という個々の主体にあるというよりも、現在の教育制度が既存の規範意識を社会化する上で機能不全に陥っているということにあるとも解釈できる。とすれば、問題の解決は個々の主体ではなく、教育制度のあり方にかかわってくる。

また、分析過程で最も気になったのは第7クラスタの存在である。他者との関係を断ち切ることで自己のアイデンティティを辛うじて維持しているかにみえるこのクラスタに所属する中・高校生に対して、「キレル」の言葉とともに一般化した「14才」あるいは「17才」の問題の温床となる危惧を抱いたことは事実である。加えて、逸脱行動として外の世界に自己の存在を明確にする第3クラスタと異なり、外見的にはむしろ模範生の第1クラスタに近いかもしれない第7クラスタの場合、突然問題が生じる。いわゆる「普通の子」が…ということになる。

また、全体として、中学から高校にかけて、既存の規範に対する逸脱行動が顕著である一方で、自己の外にある「ヒト・モノ・コト」との関係、とりわけ友だち関係に選択基準が移行していることも把握できる。次の時代を生きる者が、前の時代を生きる者の期待する既存の規範に批判的であることは、何も今に限ったことではない。まして変化を常として社会に生きる者にとって、むしろ既存秩序への逸脱こそアイデンティティの中核にならざるを得ないのかもしれない。ただし、それを是認するのは、逸脱の後に新たな規範の創造の芽が見出される限りにおいてである。

しかし、本調査結果が示唆するのは、2本目の軸として友との関係を重視するという傾向が見出されたものの、より積極的に彼ら彼女からが独自に創造しつつある文化としての規範にまで及ぶものとは理解できなかったことも指摘せざるを得ない。既存の規範を批判するものの、新たな規範を見出せずに身近な友との関係に依存する、という閉じた構造が存在しないか。さらに身近な友との関係重視とは、何も新しいことではなく、戦後日本社会を特色づけた間人主義の縮小再生産のように思えてならない。

さまざまな逸脱行動も大人社会への反発というよりも、仲間の目のみを意識した行動とすれば、企業社会の中で会社の論理と倫理にとらわれてきた親の世代と何ら変わらないことになってしまう。規範意識の低下を嘆く側と嘆かれる側の距離は、案外近いかもしれない。違うのは規範を共有する仲間の特性であって、自己の内的規範より仲間との関係を重視する規範意識の構造自体に大きな変化はないのかもしれない。

しかし、そのような日本的間人主義が、良くも悪くも克服せざるを得ない課題になっていることは周知のとおりであろう。とすれば、いま問題とされる子どもや若者の規範意識の低下とは何なのか。単に捨てるべき規範への郷愁にすぎないのか。あるいは、より積極的に内在化すべき規範を見出せないアイデンティティクライシスの現代版なのか。あるいは、全く新たな人を人として教え育てる制度の誕生を求める子どもたちの悲鳴にも似た行動なのか・・・。

以上、数量化やクラスタ析出過程で分析者の脳裏に浮かんだ事柄の一端を思い出すままに提示してきたが、言うまでもなくこのような解釈には、データではなく分析者自身の観点が多分に加味されていることは理解されよう。したがって、上記の事柄は本分析の結果明らかになったことでもない。あくまで私見である。あえて言えば、先に紹介した分析データを読む際のモデルを提示したにすぎない。モデルである以上、否定されることを前提に提示した。

データが示す事実の一つでも、その事実が示唆する意味の範囲は、それを読み取る人の数だけあると言っても過言ではないことを改めて強調しておきたい。

## 注記

本研究は、松永（静岡産業大学）三澤（静岡大学大学院教育研究科平成13年度修了）が調査票の作成と調査結果の分析、一杉（サーベイリサーチセンター静岡事務所）が調査票の作成と結果の統計処理ならびにその分析、馬居が調査研究の総括を担当した。また、本報告は四人の共同討議をふまえ、馬居の責任でまとめた。したがって、その分析に関しては四人の共同作業であるが、本報告の内容の責任は馬居にある。また、本報告をまとめるにあたり、データや図表の作成等においては本学部3年生の木戸美也子の助力を得たことを、感謝の意を込めて記しておく。

## 資料・調査概要

### 資料 1

#### 「静岡県青少年問題協議会による青少年・保護者の規範意識に関する調査」

本研究は、本文でも指摘したように、静岡県青少年問題協議会による、青少年・保護者の規範意識に関する調査の中学生・高校生を対象とする調査の一部を用いて行なったものである。そこで、その母体となった調査全体の内容について記しておく。

### 1. 調査の目的

近年の青少年非行の現状は、深刻な状況である。また、規範意識が低下した青少年増加が指摘されている。

青少年の規範意識の低下を分析するためには、青少年の規範意識が培われる過程での問題点やその背後にある社会的基盤（社会環境や友人・保護者等との人間関係など）との関わりについて明らかにする必要がある。また、青少年の規範意識の低下の現状把握だけに止まらず、青少年が属する集団がど

のような規範意識を持ち、どのような規範意識に対する価値観を持っているのかを明らかにする。

これらにより、これからの社会が求める規範意識を探り、積極的な施策を展開するための基礎資料を得ることを目的として調査を行う。

## 2. 調査対象

### (1) 青少年調査

県下の小学5年生、中学2年生及び高校2年生

### (2) 保護者調査

調査対象となった中学2年生の家庭及び県下の幼稚園・保育所に通う子どものいる家庭の保護者

## 3. 抽出方法

対象者の抽出にあたっては、以下の点に留意した。

- ・ 小・中・高校生についてはクラス単位で抽出
- ・ 東部・中部・西部、都市部・町村部の地域について考慮
- ・ 高校については、普通高校、専門高校、定時制高校についても考慮
- ・ 保護者については、各家庭で父親、母親から回答が得られるように考慮

## 4. 調査数

	配布数	回収数	回収率 (%)
青少年調査	1,946	1,887	96.9%
小学生	636	627	98.6%
中学生	666	649	97.4%
高校生	644	611	94.9%
保護者調査	1,398	1,292	92.4%
幼稚園・保育所	720	692	96.1%
中学生	678	600	88.5%
全体	3,344	3,179	95.1%

## 5. 調査方法

- ・ 幼稚園、保育所、学校を通じた配布、回収
- ・ 無記名方式

## 6. 調査期間

平成12年12月

人間関係からみた各クラスタの特性

